

イソタケル祭祀の足跡

いそたけるのかみ

神の猛五十 真相に迫る

④

三井 淳

五十猛町の漁港がある大浦地区の氏神を韓神新羅神社というが、これは祭神を

ルの祭祀はこの二座のみである。実は五十猛町よりの西の石見部では、イソタケル祭祀は一つも見いだせず、隠岐の二座を除き、あとは全て出雲部に存在し、県内では三十座に及ぶ(主祭祀祭境内摂社にかかわらず。島根県神社庁「神國島根」および五十猛歴史研究会調べ)。つまり、

スサノオ、オオヤツヒメ、ツマツヒメとするがゆえ、一見イソタケルとは無縁のようではある。しかし冒頭の韓神(からかみ)とは、実はイソタケルのことなのだという平田篤胤の説には説得力があり、ほぼイソタケル祭祀と見て間違いない。韓神については、後編で詳述する。純然たるイソタケルの神社は、同じ五十猛町の東部、湊(みなと)地区の五十猛(いそたけ)神社となり、これはイソタケルの陵墓とされる。

大田市におけるイソタケから東へ、なのである。五十猛町はイソタケル祭祀の西限とも言えるが、本質的には出発点なのである。なんとなれば、日本固有のもの移動というものは、人にしろ自然(風、天気、海流)にせよ、基本的に西から東へ、なのである。

出雲におけるイソタケルの初踏点は、出雲市斐川町神立(かんだち)の「立虫(たちむし)神社」となる(現在の神西湖は十七世紀の中頃までは、その五倍以上の規模を誇る「神門水海(かんどみずうみ)」であって、斐伊川は元来こへ注いでいた。立虫神社はちよつとその河口付近に当たる。五十猛の海岸から見れば、神門水海はまこと指呼の間であって、かつては多くの五十猛の漁船が神西沖に出没していたという。

を数える。その主立つものは、斐川町神水の曾只能夜神社同社韓國伊太氏(からくにいたて)神社、奥出雲町仁多の伊賀武(いがたけ)神社、同横田の伊賀多氣(いがたけ)神社、同鳥上(とりがみ)の鬼神(おにがみ)神社であり、鬼神神社裏手の船燈(せんとう)山には、イソタケルの陵墓がある。

立虫神社以降斐伊川沿いには、イソタケル祭祀の神社が整然と軒を連ね、十座(五十猛歴史研究会会員、みつあいあつし)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす
◇木曜日は内藤博之さんの「ガウデ